

論 文

問 う こ と と 歴 史

的 場 哲 朗

「・・・彼はあるとき、星を観察するために、老婆を伴って家の外に出たが、溝に落ちてしまった。そこで大声で助けを求めたら、その老婆はこう答えたというのである。『タレスさま、あなたは足下にあるものさえ見ることがおできにならないのに、天上にあるものを知ることができるとお考えになっているのですか』と」。

——ディオゲネス・ラエルティオス

問うということは、なにも人間の特別な行為ではない。ある答えを求めて問い模索することは、常日頃繰り返されていることである。しかし、どうであろうか。ひとたび答えが手に入れば、問うという行為は忘れ去られる。答えというひとつの結果の輝きのなかで、問うという行為はいつの間にか忘れ去られ、消え去って行く。問うということは、答えを求めるための単なる行為にすぎなかったかのように。今日、問うということはどうであろうか。今日、科学的な「思惟」方法が広く行きわたっている。自然は、当然なことのようにより、「空一時的に関係づけられた質点の、それ自身において完結した運動連関」⁽¹⁾として描かれる。「物質のあるところ幾何学あり」(ケプラー)や、自然という「この書物は数学的記号で書かれている」(ガリレオ)といった近代自然科学的精神——metodo resolutivo et metodo compositivo——は広く行きわたり、実験 (experientia) や数学 (τὰ μαθήματα) が自明なこと

のように援用され、これを欠けば、すべて問うことは意味がないかのように決めつけられる。かつて呪術的世界観の呪縛から、問うことの自由さを救った近代科学の革新性は今や失われ、それは神話と化し、逆に、他の様々な問うことを弾圧するための教条となり、「科学」の名の許に人々は問うことの自由を失いつつある。現代とは、科学的な「思惟」方法をイデオロギーにまで仕上げ、これに同化しないすべての思惟を没価値として放棄する時代、端的に言って、科学的な「思惟」というイデオロギーによる免疫化が広範に進んだ時代なのである。このような時代のなかで、人間の問うという行為はその固有の力、その固有の場所を失ってしまった。おそらく、人類の歴史を顧みれば、かつて世界観の閉塞は訪れたにちがいない。しかしその都度世界観の活性化は行なわれてきた。人間のもつ問うことの自由さが革新性を生み、活性化を荷なってきたのである。しかし今日、問うことそのものが免疫化してしまっている……。活路はどこに求めるべきなのか。そして哲学は何をなすべきなのだろうか。

「……危険のあるところ、救うものもまた育つ」⁽²⁾。

ハイデガーはヘルダリーンのこの句を好んで引く。乏しい時代だからこそ、救うもの、つまり活性化も生まれると言わんばかりに。問うことの重要性を見抜き、その問うことのなかに自ら身を投じ、この問うことのなかから一步一步踏み分け道を開いて行く——このような現代における孤高の敢行を試みた一人の思惟者こそハイデガーであった。そして、ハイデガーのそのような姿勢を彼の『形而上学入門』(1935)が物語るのである。したがって、われわれはこの講義録を手掛りに論じたい。

ところで、時代の閉塞性と、問うことの自由とわれわれは語った。もちろん、『形而上学入門』に先立つ『存在と時間』(1927)にもそのような一面がないわけではない。ハイデガーが、その著作の巻頭に敢えて西欧の古典であ

るプラトンの『ソフィステース』からの問いを引いて、この問いにたいする答えが今日においてもないばかりか、それを問うことすらも忘却されてしまった、と語るとき⁽³⁾、そこには時代の閉塞性が重ね合わされていないとは言えないであろう。そして、問うことの自由も現象学的方法として次のように定義されている。すなわち、「現象学とは、……己れを示すものを、それが己れ自身から己れを示すように、それ自身から見させること、を意味する」⁽⁴⁾と。しかし、『形而上学入門』においては、「ヨーロッパ」、特にドイツは、ロシアとアメリカとの「万力」(Zange)のなかに横たわるものと捉えられ、問うこと——ハイデガーの場合、存在を問うこと——は「西洋の精神的宿命」⁽⁵⁾であるとまで表現されるに至っている。ここでは、問うことは「徹頭徹尾歴史的に問うこと」⁽⁶⁾なのである。歴史的に問う——問うことがこのようにならざるをえない理由がある。ハイデガーの問いは、「現存在」と術語的に呼ばれる人間存在の実存の事実性から、言い換えれば今—ここに現に存在する人間存在の事実性から出発するのである。この人間存在は、判断主体としての人間でも、「身体的—⁽⁷⁾霊的—精神的統一」として把握された人間でもなく、むしろ歴史のなかに事実として生きている人間なのである。したがって、問うということは常に、歴史の必然性 (Notwendigkeit) のなかに立って決意しつつ問うという性格をもたざるをえない。

ともあれ、本稿の構成は以下になる——。

I. 問うことの性格

II. 時代の閉塞と問うことの必然性

III. 結論

I. 問うことの性格

ハイデガーはすべての問いのなかの第一の問いとして次のような問いをあげている。

「なぜ一体存在者があるのか、そして、むしろ無があるのでないのか」⁽⁸⁾(Warum isi überhaupt Seiendes und nicht viel-mehr Nichts?)。

全体としての存在者そのものを越えて問うことこそ第一の問いである、とハイデガーは語りたいのである。では、誰が問うのか。決意や意欲をもてば、どんな人でも問うことができるのだろうか。

ハイデガーは、この「どんな人でも」ということにはっきりと拒絶を示す。たしかに「深い絶望」や「心からの歓喜」や「倦怠」のなかでどんな人もその第一の問いに遭遇しないわけではない⁽⁹⁾、しかし彼らはそれを問い詰めることがない、いや多くの場合、さしあたって大抵の物事の方に気を取られて、結局その問いを第一の問いとして引き受けることはない、というのである。彼はこのことを次のように表現している。

「ただ、問題は、われわれがまことに平凡なこの外見の犠牲になることを願って、すべて問題なしと思い込んでしまうか、それともなぜの問いのこの自己自身への跳ね返りを一つの由々しい出来事と認めることができるかどうかということである」⁽¹⁰⁾。

あるいはこうである。

「根源的な能力としての問うことに、いつになっても縁がないような人間的一歴史的現存在の周辺内に入れば、この問いは直ちに第一というその第級を失うのである」⁽¹¹⁾。

必要なことは、問われている事柄をとにかく重大な出来事であると問題化し、これに答えて行こうとするある種の能力が備わっているということ、したがってどんな人でも提出できる問いではないということ——ハイデガーは

そのように語りたいのである。

このような能力をもつ人々としてハイデガーは詩人（Dichter）と思惟者（Denker）とをあげている。能力をもつ人々、詩人、思惟者——このように並べてしまうと、ここにある意味での「エリート主義」のようなものが顔を出す。表現はどうであれ、そういう面が出てくる。逆に言えば、そのような能力を失った人々が支配するのが現代なのである。問うという能力を失った者のみが支配的となり、「延長と数」⁽¹²⁾のみが時代を支配する。この時代においては、欠如は欠如として自覚されることはない。敢えて思惟の自由を守る人々は、それだけですでに「超えた者」であり、「異常な」ことを問うものとされる。今日、問うことを守るということは、かつてポリスにおいてソクラテスがそうであった以上に、困難であり、多くの目から見ること、異常な、ものとならざるをえないのである。

問うことは「支配的」なものを——ソクラテスがそうであったように——超えて問わねばならない。しかし、問う者も支配的な日常生活に浸されている。このかぎり、偉大な決意が、問う者に求められる。⁽¹³⁾問うということは、「支配的」なものを超えて行く決意を引き受けることなのである。思惟者と詩人といった少数者と、敢えて「支配的」なものを超えて行く決意——ここにハイデガーの問うことの核心、そしてさらには現代にたいする使命がある。彼が引くニーチェの言葉をここに引いてみよう。

「哲学者とは、いつも異常なことを体験し、見、聞き、疑い、希望し、夢みる人間である……」⁽¹⁴⁾。

彼自身もまた簡潔に次のように語っている。

「哲学するとは異常なことを問うことである」⁽¹⁵⁾。

ハイデガーに従うかぎり、問うこと（哲学すること）とは、「平常通りの

こと」、「普通のこと」、「毎日きまりきっている尋常平凡なこと」、端的に言えば、日常われわれに出会ってくる存在者の全領域、これらを超えて行くことである。日常生活から見れば、それ自体すでに異常なことであると言えよう。

ところで、存在者を全体として超えて行くという問い自体は、歴史的に見ればアリストテレスの *τὰ μετὰ τὰ φυσικά*（自然を超えたもの）に由来する。存在者全体を超えて問う(形而上学)ということは、ハイデガーにとって「第一の問い」であつたばかりでなく、実は西欧の哲学史全体を貫く根本テーマでもあつたのである。ギリシアは自然へ、中世は神へ、そして近代は人間へと形而上学的に問う。しかし翻って考えるに、自然も神も人間もその領域こそ違え、やはり一つの存在者にすぎない。存在者全体を超えるとしながらも、存在者に逢着せざるをえなかった西欧の形而上の歴史——。ハイデガーは形而上学の伝統に従いながらも、実は伝統的形而上学の不徹底性を批判しているのである。第一の問いとは、現代という時代に「支配的な、ものを超えるばかりか、形而上学的に問うことを通してその実、西欧の形而上学の歴史そのものを超えようとするものなのである。科学といえど、その源泉は西欧形而上学の伝統に基礎をもつ。ハイデガーの科学批判は科学そのものの批判であるよりはむしろ、その基礎である近代形而上学の批判という形をとる。⁽¹⁶⁾ この批判の鋒先は当然、西欧形而上学のなかで培われ育成された諸概念や、日常生活に支配的な言語（雑談、標語、慣用句）に向う。ハイデガーはこのような言語の非根源性を見貫き、むしろ第一の問いの事柄に基づく言語、力ある言語（*Wortkraft*）を育成し、これを、問う行為の基礎とする。彼がヘルダリーンを詩人のなかの詩人と呼ぶのは、まさにヘルダリーンが力ある言語を守ったからなのである。思惟者とはまさに言葉を守る者なのであり、詩人と同じ業に身を献げる者なのである。ハイデガーには、伝達の一手段としての言語という「考え」はまったくない！

『存在と時間』の方法が現象学であることはすでに述べた。それは定義としては現象を記述することであると言えようが、一層具体的に言えば、(日常的な存在概念に反対して) 人間の存在了解を隠れなく言葉に現し守ること

である。このかぎり、人間の実存論的分析論を目標とする『存在と時間』の問うことも、基本的には形而上学的性格をもっていることに変わりはない。しかしもちろん、全体における存在者が全体として滑り落とされる点から言えば、ハイデガーの言う「第一の問い」は徹底的である。もう一度引こう。

「なぜ一体存在者があるのか、そして、むしろ無があるのでないのか」。

このように問うことにより、現代のうちに自明となったすべてのものが滑り落ち、その意味が明かになるのである。しかし、なぜ第一の問いは問われねばならないのか。現代の歴史的閉塞の状況があるのであろうか。

Ⅱ．時代の閉塞と問うことの必然性

歴史的閉塞とはどういうことなのか。問う思惟者ハイデガーの現代の状況とはどういうものなのか。この疑問に彼は『形而上学入門』において数ヶ所で触れ、自らの状況を説明している。

「このヨーロッパは今日救いがたい盲目のままに、いつもわれとわが身を刺し殺そうと身構え、一方にはロシア一方にはアメリカと、両方からはさまれて大きな万力のなかに横たわっている」。

あるいは、

「大地の精神的墮落はひどく進んでしまつて、諸民族は（ ）存在《の運命との関連から見た）墮落を見て、それを墮落だと認めることができるだけの精神力の最後のかげらさえも失

いかけている」⁽¹⁸⁾。

そしてさらに、次のように、

「世界の暗黒化、神々の逃亡、大地の破壊、人間の集団化、
創造的で自由なもののすべてに対する嫌疑、これらが既に
全地上にひどくはびこっている……」⁽¹⁹⁾。

これらの文章が語るものは——今日、すでに陳腐とさえ感じられる言葉であるが——「ヨーロッパの危機感」といったものであろう。ロシアとアメリカとの「大きな万力のなかに横たわっている」と断言した表現はハイデガーの現代の歴史的状況を端的に示していると言えよう。

しかし、単なる「ヨーロッパの危機感」の指摘に留っていない。ハイデガーがロシアとアメリカに触れるとき、彼はその両者が共に同じ形而上学的伝統の上に築かれ、平凡人の底のない組織と共に狂奔する技術の絶望的狂乱を代表している⁽²⁰⁾、と言うのである。両国では技術が異常な発達を遂げ、すべては「延長と数」の次元に還元される。時間は人間生活を離れて単なる速さや瞬間となりさがり、空間は技術の力によってその距離を失いつつある。何千キロも離れた事件がほとんど同時刻のうちに伝達される。時間や空間は、かつてヨーロッパの生活のなかにあった意味を失ったのである。そうして、人間の尊厳も平坦化され凡俗化され集団という量にとって代られる。人間の精神は無力化し、今や精神の解消、消耗、駆逐、誤解が生れつつある。

人間の尊厳の平坦化——。「神々の逃亡」、「大地の破壊」、「人間の集団化」、「凡庸の優先」といったニーチェの言葉を引く⁽²¹⁾ハイデガーは、人間の精神の頹落について次の四つのことを語る。⁽²²⁾

- (1). 精神は知性 (Intelligenz) と解され、目の前の事物を考慮し計算し考察し、改良したり作り出したりすることの「総明さ」(Ver-

ständigkeit) にすぎない。

(2)、精神は何かに役に立つ道具 (Werkzeug) にすぎない。

(3)、精神は意識によって育成したり立案したりできる部類のものにすぎない。

(4)、精神は贅沢品、装飾品にすぎない、と。

人間の尊厳の証であったはずの精神は今やそのような状況だというのである。

現代の状況はロシアとアメリカに代表され、「延長と数」や「大衆」が支配する。この状況のなかで、問うことは凡庸なものと化す。しかし、この凡庸を超えて問う例がかつてなかったわけではない。今世紀の哲学的思惟に決定的な影響を与えたマルクス、キルケゴール、ニーチェは、彼らが生存した19世紀においては例外中の例外、つまり「異常なこと」だったのである。

「問うこと」をハイデガーが強調し、問うことに自ら身を献げるとき、そこには、マルクスが「人間疎外」と言い、キルケゴールが「大衆化」を見、ニーチェが「神の死」を語ることと相繋がる「例外者」の意識がないであろうか。

主著『存在と時間』は存在への問いをめぐる展開される。この問いを提起するに際し、ハイデガーは「存在の問いをはっきりと取り戻す必然性 (Notwendigkeit)」²³と切り出す。Notwendigkeit、つまりNot (苦境、危急) に Wenden (向きを変える) するのである。この Wenden はけっして客観的な状況論ではない。むしろ、常に現代の歴史的状況に立ち、これを受けようとする決意そのものなのである。この決意が、歴史的閉塞を通して西欧の形而上学全体を取り戻す必然性を開く。現在の存在者を全体として問うことが、すなわちそれ自身形而上学的問いとなるのである。これの端的な表現

こそ、ハイデガーの「第一の問い」なのである。

Ⅲ．結 論

問うことをハイデガーに従って歴史の閉塞から解明した。もちろん、『形而上学入門』のごく限られた箇所を手掛りにしただけであり、必ずしも十分な展開とは言いがたい。しかし、歴史の開塞から、問うことの構造は明らかになる。まず、凡庸なものや頹落が支配し、問う者に差し迫る（「大きな万力のなかに横たわっている」）、問うことは、したがって凡庸なものや頹落を全体として超えて問う決意を要する、しかもこの決意自身形而上学的伝統に立つのである。さらには、この問いの差し迫りと問う決意は当のハイデガーにおいて生ずることなのである。

歴史的伝統がただ単に贈与するものを受け入れ、これを分析するという姿勢ではなく、当の問う者が歴史的閉塞を将来へと向けてつかむなかで伝統は過去のものとして浮びあがってくるのである。このかぎり、決意や意欲に縁のない人々や、身近の価値観に没入している人々にとって、本来的な意味での問うという行為は生れてこないのである。結局、問うことにおいて要となるのは、結果ではなく、問う決意なのである。創意はつまるところ、人間自身に秘蔵されているのであり、人間自身が不思議さや驚きを隠しているのである。ギリシアの悲劇作家ソフォクレスもこのことをコロスに歌わせている。

「不思議なものは数あるうちに、
人間以上の不思議はない」⁽²⁴⁾と。

注 釈

- (1). M.Heidegger, `Die Zeit des Weltbildes、 (in:Holzwege) S.72
- (2). M.Heidegger, `Die Frage nach der Technik、 (in:Vorträge und Aufsätze Teil 1.) `S.35
- (3). M.Heidegger, `Sein und Zeit、 S.1
- (4). M.Heidegger, `Sein und Zeit、 S.34
- (5). M.Heidegger, `Einführung in die Metaphysik、 [以下EiM.と略す] S.33
- (7). M.Heidegger, `Sein und Zeit、 S.48
- (8). M.Heidegger, EiM. S.1
- (9). M.Heidegger, EiM. S.1
- (10). M.Heidegger, EiM. S.4
- (11). M.Heidegger, EiM. S.5
- (12). M.Heidegger, EiM. S.35
- (13). M.Heidegger, 「問うとは、知ることを一意味することである」。EiM. S.16
- (14). M.Heidegger, EiM. S.10
- (15). M.Heidegger, EiM. S.11
- (16). 拙論「ハイデガーと技術」を参照のこと（白鷗女子短大論集 第八巻第二号）。
- (17). M.Heidegger, EiM. S.28
- (18). M.Heidegger, EiM. S.29
- (19). M.Heidegger, EiM. S.29
- (20). M.Heidegger, EiM. S.29
- (21). M.Heidegger, EiM. S.29
- (22). M.Heidegger, EiM.35ff.
- (23). M.Heidegger, `Sein und Zeit、S.2
- (24). ソフォフレース, 『アンティゴネー』